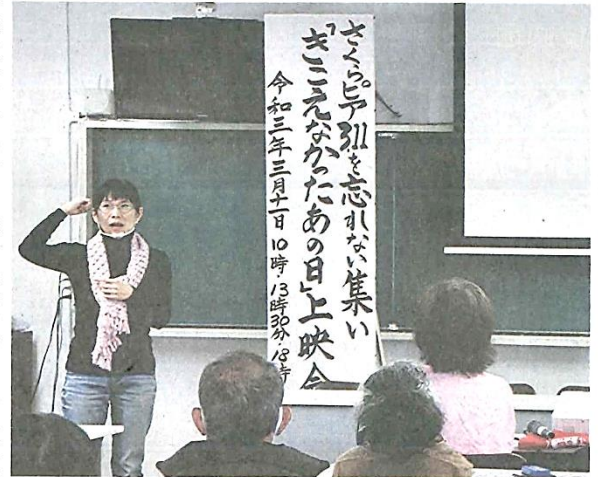


# 震災時のろう者に焦点

## 豊橋で記録映画の上映会



手話を使ってあいさつする今村さん＝豊橋市のさくらピアで

生まれつき耳が不自由な映画監督、今村彩子さん(四二)＝名古屋市中村区が、東日本大震災から十年間のろう者らの歩みをまとめたドキュメンタリー映画「きこえなかつたあの日」の上映会が十一日、豊橋市東新町の市障害者福祉会館さくらピアであった。今村さんも会場を訪れた。

映画は二〇一三年に制作した別の作品が基になっている。今村さんは震災直後に被災地を回り、大津波警報を知らせるサイレンが聞こえず、近所の人に助けられた人ら取材。ろう者が災害時に直面する問題に焦点を当てた。

その後も年に二、四回ほど現地を訪れ、自らカメラを回してきた。二年前にさくらピアの本田栄子事務長から上映依頼があったことをきっかけに、震災十年の節目に合わせ、今回のドキュメンタリー映画づくりを

決めたという。

作中では、ろう者が避難所や仮設住宅で苦しい生活を送りながら、手話通訳者や友人に見せる笑顔を多く取り上げている。手話の普及を目的とした「手話言語条例」が全国の自治体で制定されるなど、手話の変遷も紹介。来場した九十人は画面に見入っていた。

今村さんは取材に「ろう者というだけでくくりにされがちだが、一人一人違う人間。人と人とのつながりの大事さを含め、作品を通して感じてほしい」と訴えた。

映画は字幕付きで一時間五十六分。全国で順次公開されており、県内では十九日まで名古屋市中村区のシネマスコーレで上映。映画「きこえなかつたあの日」公式サイトからも有料視聴できる。

(斎藤徹)

# 聴覚障害者らの避難描いた映画

## 豊橋で上映

豊橋市のさくらピア(市障害者福祉会館)では、震災で被災した聴覚障害者や難聴者を描いたドキュメンタリー映画「きこえなかつたあの日」が上映され、豊橋聾学校出身で「豊橋は第二のふるさと」と話す今村彩子監督が駆けつけた。

今村監督は「3・11」後も熊本地震など各地で頻発する地震や豪雨に見舞われた被災地に足を運び、被災者に向き合い続ける。「障害の有る無しに関係なく、一緒に活動、交流するなどしてふだんから顔の見える関係を築くことが大切ではないか」と話した。

豊橋市役所では、被災地の特産品を職員向けに販売する「豊橋東北幸福市」があった。「息の長い支援を」と被災地へ長期派遣された職員ら有志が2014年度から続けてきた企画



今和三年三月十日

で、派遣先の宮城県石巻市や南三陸町、福島県いわき市から取り寄せたサバ缶やワカメ、清酒など約りすぐりの10種類が用意された。公務外の取り組みで売上金を被災地へ寄付してきたが、節目を迎えた今回が最後になる。職員の長期派遣も今年度限りだが、意識の風化を危惧する市防災危機管理課長補佐の長坂規弘さんは「被災地支援の活動を今後も続けたい」と話す。